

文字をとりもどし、 ともにまなびあうよるこびを

文字を学ぶ喜びをともに よみかき交流会

よみかき交流会が1月28日、29日、白浜町シーモアでおこなわれ、今年も各識字学級から指導者・識字生74人、県・行政からの参加者を合わせると100人をこえる交流会となった。



あいさつする楠義隆県生涯学習課局長

会場の壁際には、識字教室で使った1年間の学習資料や作品展示をし、スタートした。

2016年度よみかき交流会の主催者を代表して、楠義隆・県生涯学習課局長から「文字をつうじて交流し、2日間の学習機会をおおいに役立ててほしい」とあいさつされた。今年も岩橋識字学級が看板作成を手掛けてくれた。体験発表「識字によって」を橋本識字教室の森中邦子さんが



体験発表する
森中邦子さん

ら発表がされ、次に実践発表「私と識字学級」を那賀識字教室の宮本睦さんからおこなわれた。その後展示している作品を見学しながら



実践発表する
宮本睦さん

ら、5つの分散会にわかれた。分散会では、みんな各教室でおこなったことなど活発な意見交換がおこなわれていた。夕食会場では、食事をしながら恒例のカラオケ大会ならぬ交流会がはじめられた。みんな元気に歌をうたって踊りも披露うし、にぎやかに時間がすす



善明寺識字学級の紙芝居

んでいった。次の日は各分散会の司会者から報告がおこなわれた。最後の研修では中山祐二・奈良市人権教育推進協議会・事務局から「これでよいということはない」とし、識字に関わってきたこれまでの実践と今後の識字学級の展望につい



分散会のようす



自身の思いの文字を記した

て話された。「のびっさん」との愛称で子どもたちとかわって来た同僚教員だった中山さんは、教え、教えられ共に学びあう姿勢を大切に、部落差別の現実に深く学び人権啓発をすすめていくといった内容で講演をおこなった。また「母は闘わん」を少しアレンジしみんなと手拍子で歌って閉会をむかえ、「来年また白浜で」を合言葉に2016年度よみかき交流会を終えた。



分散会のようす



分散会のようす

連載
(4) 後
没50年

解放の父
松本治一郎⑦

連載の7回目となる。昭和十一年、一九三六年の年頭に水平新聞に全国委員長としての松本治一郎の決意が載せられている。「世の中は、もうどうにもならぬようになってきております。言い換えると、今までの通りの政治のやり方や仕組みや今の支配階級ではどうにもやっていけないところまで行き詰ってあります。私たちがお互いすべての被圧迫労働大衆と固く固く手を組んで、治一郎は、全国委員長として部落の生活改善に多くの力を注いできた。その一環として議会での取り組みを強化して、組織内議員の選出や他の候補の応援なども行ってきた。加えて日に日に強まるファシズムの台頭に危機感を覚えている。その年の衆議院選挙に福岡1区から立候補したのがあった。結果、第3位で当選を果たした。

その時の思いを後に、井本麟之は「解放運動にとつて実に大きな成果であったと思います。それまで私たちの代表者は、国会に一人もいませんでした。感極まって、万歳を叫び、涙を流して喜びました」と語っている。さて、その二週間後にあの2・26事件が起き、軍部の発言力がますます強まってきた、そんな世

情の中、治一郎の新たな闘いが始まったのであった。その5月1日に、初めて国会で質問に立った。「人間の住む社会に、人間として生まれたるものが、人間として生きられない、そういう人がおるならば、その社会は大いなる矛盾、不合理の社会と言わざるを得ないのであります。」「その矛盾、その生活者があるがために水平運動があるのであります。」「人間として生まれた以上、人間として生きたい。それが水平運動の本当の気持ちであります。治一郎は、六千部落三百万の思いを国会に響かせた。そして、差別事件を例に政府の姿勢を糾弾し、生活の実態を示して、差別の結果が悲惨な生活を生み出しているとして、大幅な改善費を要求した。さらには「社会に巢を食うところの特権階級」と華族制度を断じ、差別観念の元凶とあるん天皇制の批判ととれる主張を展開した。またこの頃、治一郎は、多くの民衆との連帯のために頻りに全国遊説を行い、全国の労働者や農民、部落大衆との交流を深め、各地の大歓迎を受けたのである。それは、松本治一郎に対する熱い期待と信頼、尊敬の表れであった。

(以下次号へ)